

公立小学校で学ぶ CLD 児の 2 言語リテラシーの縦断研究

—音読行動から見た発達を中心に—

真嶋 潤子 (大阪大学)

櫻井 千穂 (大阪大学)

1. はじめに

日本の公立学校に通う CLD 児童(Culturally Linguistically Diverse Children)の教科学習言語能力(Academic language proficiency、Cummins、2003)を育てるのに読み書きの力の育成が重要であることは、既に周知の事実であろう。彼らが母語での読み書きの力を獲得した上で、第二言語としての日本語の読み書きを習得するのであれば、母語での読み書きに使用するストラテジーを日本語習得に活用することができるが、日本語が読み書きを学ぶ最初の言語である場合、例えば、文字から音への符号化や単語の同定といった音読行動の概念も日本語習得の過程で初めて学ぶことになる。このようなケースの場合、日本語の音読行動を観察し、伸ばすことは、読みの力の発達段階の特に初歩期から形成期に非常に重要となるが、国内では CLD 児童の音読行動の発達についてほとんど報告がない。

櫻井(2013)では、日本生まれの中国ルーツの CLD 児童、小学 1-6 年生 63 名と日本人児童 92 名の日本語読書力を調査し、音読行動の重要な指標となる音読速度(MPM; mora per minute)の差を調べたところ、低学年($t=4.018$, $df=50$, $p<.001$), 中学年($t=3.393$, $df=48.768$, $p<.01$), 高学年($t=4.113$, $df=50$, $p<.001$)ともに有意差が確認され、日本生まれの CLD 児童の音読行動の課題が示された。

しかし、本調査は横断的調査であり、児童の音読行動の変化を縦断的に示したものではないため、教育への示唆は限定的である。

2. 研究目的

真嶋・櫻井(2015)では低学年時に母語を活用

しつつ読み書きの基礎を育てる教育実践を行った 14 名の中国ルーツの CLD 児童の二言語の会話・読書力を小学 1、3、5 年時に縦断的に調査し、考察を行っている。本発表では、冒頭に述べた背景を踏まえ、真嶋・櫻井(2015)のデータのうち日本語の音読速度に焦点を絞り、分析を行う。具体的な研究課題は、1) 公立小学校で学ぶ CLD 児童の日本語音読速度はどのように変化し、どのような特徴が見られるか 2) その音読速度は読書力とどのような関係があるかの 2 点である。本課題を明らかにすることで、音読行動の側面から、支援のあり方について考察を深めたい。

3. 調査方法

調査には対話型読書力評価ツール DRA(中島・櫻井、2012)を使用した。テキストレベルは、上から順に下げる方法で児童自身に読めると思えるものを選択させた。そして、その選択したテキストをテストと一緒に読み切り、内容理解を確認した。手順は内容予測→読み聞かせ→音読→(テキストレベルに応じて)音読か黙読→あらすじ再生→解釈→読書傾向に関する質問である。その過程を録音・文字化し、評価・分析を行った。

音読速度は、あらかじめ設定した音読箇所を測定し、1 分間に読める拍数 (MPM) を算出した。読書力の指標としては、選択したテキストレベル(TL)と読解力得点(Score)を用いた。読解力得点については、6 項目の読解力評価基準に従って、4 段階のルーブリックで採点し、その理解度を 6-24 点で算出した。評価の信頼度確保のため、全児童に対し、2 名(本発表者)で評価を行った。

4. 結果と考察

No.	G1			G3			G5		
	TL	MPM	Score	TL	MPM	Score	TL	MPM	Score
C101	G1-2	254.2	18	G3	296.7	19	G5	308.1	16
C102	G1-1	83.7	19	G3×	114.2	15	G4	151.4	15
C103	K2	141	12	G2	257.7	9	G4	302.9	15
C104	G1-2	104.2	14	G2	203.3	17	G4	223.9	16
C105	G1-1	162.9	19	G2	269.1	12	G4	251.3	17
C106	G1-1	115.4	19	G3×	127.9	18	G4	233.7	19
C109	K2	94	23	G2	183.0	21	G4	227.7	22
C110	G1-2	294	14	G2	366.0	12	G4	309.8	17
C111	G1-2	156.2	12	G2	240.8	16	G4	263.8	14
C112	G1-2	202.7	13	G2	225.9	8	G4	240.0	13
C113	K2	58.7	14	G2	156.4	12	G4	251.3	16
C114	G1-2	250	21	G2	281.5	16	G5	265.1	17
C115	G1-2	166.7	18	G2	228.8	15	G4	240.0	22
C117	G1-2	405	20	G3	368.3	22	G5	395.2	23

表 1. 1, 3, 5 年時の音読速度と読書力結果¹⁾

まず、表1の結果をもとに1, 3, 5年時の音読速度に差があるかを検証するために分散分析を行ったところ、5%水準で主効果が確認された($F(2,39) = 4.280, p < .05$)。さらに Tukey 法を用いた多重比較により、1年時と5年時の間の有意差が確認され、1年時から5年時まで緩やかに音読速度が速くなっている傾向が見られた(1-3年時、3-5年時では有意差は確認されなかった)。本調査では、どの児童も選択するテキストレベルが年を追うごとに上がっている。テキストレベルが上がっても、尚、速度も速くなっていることから、全ての児童の音読の向上が見て取れる。

一方で、読書力との関係でみると、レベルを下げずに年齢相応のテキストを選択し、一定程度の速度以上²⁾で読めた児童は、1年時6名(C101, C110, C112, C114, C115, C117)、3年時2名(C101, C117)、5年時3名(C101, C114, C117)と半数以下に止まり、テキストレベルの選択と音読速度間にも中程度の相関($r = .560, p < .01$)が見られた。そこで、1, 3, 5年時の個々の児童の音読速度の関係をみてみると、1-3年時が $r = .892, p < .01$ 、3-5年時が $r = .851, p < .01$ 、1-5年時が $r = .821, p < .01$ と共に高位の相関が確認された。また、1年時に一定速度以上だった6名とそうではない8名のグループ間で、それぞれの学年での速度平均の差を分散分析によって調べたところ、5%水準で主効果が確認され($F(5,36) = 0.475, p < .05$)、その

後の多重比較でこの二つのグループで、1年時、3年時に5%水準で有意差が確認された。5年時になると音読速度差は小さくなるが、それでも1年時の傾向は、3年、5年時の音読速度にも影響しており、それがテキストレベルを規定する要因にもなりうる可能性が示された。ただし、読解力得点と音読速度については全ての学年において相関が見られなかった。

以上の結果を踏まえ、教育のあり方を検討すると、まず小学校入学後の文字導入はとりわけ丁寧に行う必要があること、そして、年齢相応ではないにせよ、どの児童もテキストレベルと速度が伸びていることから、読書の質と量を確保しつつ、読書活動を継続することが非常に重要であることが改めて示された形となった。

注)

- 1) 表1のテキストレベル(TL)の「K2」は幼稚園長、「G1-1」は小1前半、「G1-2」は小1後半レベルを表す。また「G3×」は、3年生用テキストを選択したが、一人では読み切れず、テスターが支援したケースを表す。
- 2) 音読速度が学年相応であるかどうかを判断するために、櫻井(2013)の日本人児童の音読速度平均(低学年 172.3 ± 12.47 mpm、中学年 221.9 ± 10.56 mpm、高学年 284.8 ± 9.79 mpm)を参照した。

【引用文献】

- 櫻井千穂(2013)「言語的マイノリティの子どもたちのバイリンガル読書力の発達」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文
- 中島和子・櫻井千穂(2012)『対話型読書力評価』
- 真嶋潤子・櫻井千穂(2015)「公立小学校で学ぶCLD児の二言語能力の発達—「対話型アセスメント」を利用した5年間の調査報告—」2015年度日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.194-199
- Cummins, J. (2003). Reading and the ESL student. *Orbit*, 33(1), 19-22.